

## 論文審査の要旨

報告番号	総研第 737 号		学位申請者	福元 大地
審査委員	主査	郡山 千早	学位	博士 (医学)
	副査	曾我 欣治	副査	高嶋 博
	副査	堀内 正久	副査	吉満 誠

### Living alone predicts poor prognosis among patients with acute myocardial infarction

(一人暮らしは急性心筋梗塞患者の予後不良を予測する)

急性心筋梗塞 (AMI) は、主要な死亡原因の一つであり、そのリスク評価として、来院時バイタルを含めたデータから算出される GRACE (Global Registry of Acute Coronary Events) リスクスコアが院内死亡率の推定に用いられている。一方、高齢化が進む現代社会では、社会的孤立や支援の欠如が重要な福祉問題となっており、社会的孤立の代用指標として用いられる「一人暮らし」は、既知の動脈硬化リスク因子に加え、心血管疾患の危険因子であると考えられている。AMI 患者の一人暮らしと長期予後については注目されているが、一定の見解は得られていない。学位申請者らは、経皮的冠動脈インターベンション (PCI) を受けた AMI 患者において、一人暮らしと AMI 発症後の長期の死亡率との関連を調査し、この関連が GRACE リスクスコアとは独立したリスク因子となりうるかを検討した。2015 年 1 月から 2021 年 3 月までの間に入院し、PCI 加療を行った 277 例の AMI 患者を対象とした。一人暮らしや GRACE リスクスコアなどの患者背景因子と、PCI 後の全死亡ならびに心臓死との関連を評価した。

その結果、本研究で以下の知見が明らかにされた。

- 1) 一人暮らし群は非一人暮らし群と比較して、全死亡ならびに心臓死の発生率が高かった。
- 2) 多変量 Cox 比例ハザード解析では、一人暮らしと GRACE リスクスコアは、PCI を受けた AMI 患者の全死亡ならびに心臓死に対する、それぞれ独立した危険因子であった。
- 3) 一人暮らしで GRACE リスクスコアが高い患者は、全死亡において相乗的なリスク増加を認めた。

日本の国勢調査では、2020 年の一人暮らしの割合は 38.1% であり、最近の研究では一人暮らしが全死亡や心血管死と関連することが報告されている。本研究では、冠動脈疾患患者の死亡率上昇と関連することが報告されている栄養状態指標の一つである GNRI (Geriatric Nutritional Risk Index) を含めた関連因子による影響を調整した後も、一人暮らしは PCI 後の AMI 患者の死亡率と有意に関連していた。一人暮らしの AMI 患者の予後が不良である要因として、一人暮らしのストレス自体が動脈硬化へ影響を及ぼす機序や、一人暮らしは、うつ病とも関連し、AMI については動脈硬化のリスク因子である生活習慣病に対する管理・治療や健康管理全般に影響する機序が考えられた。未だに AMI 患者の予後は良好とはいえず、早期にリスク層別化を図り、集学的な介入で予後の改善を目指す必要がある。

本研究は、PCI を受けた AMI 患者の一人暮らしと死亡リスクとの関連を検討した。その結果、一人暮らしは AMI 患者における独立した予後不良因子であり、GRACE リスクスコアが高い患者においては相乗的なリスク増加をきたす可能性が示唆された。救急外来において情報収集可能な生活環境である「一人暮らし」の有無と、簡便に算出できる GRACE リスクスコアの評価は、AMI 患者の予後予測に有用である点は非常に興味深い。

よって本研究は学位論文として十分な価値を有するものと判定した。